

文学部でスポーツを学ぶ！スポーツを学ぶ？

江川陽介

はじめに.

本報告は、2012年に開催された人文学会シンポジウムにおいて、文学部で学ぶということについての意味や意義を議論できるようにと、極論に近い方向で考察を展開し、提題者として聴衆に投げかけた内容を文章化したものである。

1. 文学部でスポーツを学ぶ？

国士館大学文学部教育学科の専門課程には、体育・スポーツを学ぶことができる講座がいくつか開講されている。しかし、本学科においては研究者の養成は求められておらず、学生も特にそれを求めているわけではない。また、スポーツ医学系の臨床のトレーナー、或はトップアスリートを育成するには文学部という「教養」を主体とした学術構成の中では不十分であり、専門家を育てるには無理がある。

一方で、国士館大学文学部教育学科では、「心身健康な人づくり」を教育目標のキーワードのひとつとして掲げている。当然ではあるが、「健康な人」をつくるためには、身体運動とその周辺諸科学の理解は欠かせない。しかし、健康な人となるために知らなければならない身体のことを学ぶにも、十分なカリキュラムがあるとはいえない。さらに教育学専攻の保健体育教員を目指すコースでは、自身が「心身健康な人」を目指しつつ、「心身健康な人」を「育てる人」を育てている。…大丈夫か？ 文学部教育学科？ とならなくもない状況である。このようにスポーツを学ぶには極めて中途半端であると評価せざるを得ない本学文学部で、体育・スポーツを学ぶ意義はどこにあるのだろうか。教員免許を取得するために必要だから？ それもあるかもしれないが、今回はもう少し文学部らしく、その考察を楽しんでみたい。

2. 健康とは何なのか

そもそも体育やスポーツが学校という教育現場で扱われるようになった起源はどこにあるのか。古代ギリシアにおける教育の考え方を調べると、「本格的教育としての知的段階に至る以前に、魂が欲望的部分によって引きずり回されて墮落することのないように、まずは魂の状態を調和のとれたものに調律する。準備教育として音楽と体育をその手段として用いる。」とある。魂を調和のとれたも

のに調律する。音楽と体育がそのための手段として位置づけられている。「健康」であることが、本格的教育としての知性段階に至る条件ということだ。すなわち、古代ギリシアにおいてスポーツ（体づくり運動や集団行動を含む）は教材として存在しており、スポーツを教材として人間が人間らしい調和のとれた魂を得ることが、教育現場における目的とされていた。

国士舘大学には体育学部があり、スポーツそのものを専門的に学ぶことができる（はず）。しかし文学部はスポーツの専門課程ではなく、スポーツそのものを学ぶわけではない。では、文学部の掲げる教育目標である「心身健康な人づくり」のためにスポーツはどのように寄与するのだろうか。「心身健康な人づくり」を掲げるわけであるからにはまず「健康」とは何かを明確にしておく必要がある。以下は世界保健機構（WHO）が示す健康の定義である。

Health is a state of complete physical, mental, and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

①病気や虚弱でないというだけでなく、②身体の体力値が高く、③知的に適切な教育を受け、④社会的（家族、地域社会、職場）には豊かな人間関係があり、⑤精神的にも安定している状態である（精神的・社会的・身体的にバランスがとれた状態）ことが「健康」であるという。なんて理想的な状態であろうか。とはいえ、確かに「健康」とは、「身体的に、精神的に、社会的に」良い状態であることが望ましい。しかしこれには続きがあるのだ。あまり知られていないが、WHOは1998年の理事会において「健康」の定義改正案を提示している。

WHO 憲章の「健康」の定義改正案

Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

改正案では、① dynamic：健康と疾病は別個のものではなく連続したものであり、身体の状態は常に変化するものである、② spiritual：生命エネルギー、生命体の本質的な部分においてよりよい状態であること、に重点が置かれている。すなわち、病気と健康とは表裏一体であり、どこからが健康で、どこからが病気かは不明瞭であることが強調されている。また、生命エネルギーの存在に対して公的な機関として初めて言及したのものとして注目に値する改正案である。

3. 「目にみえる身体」と「目に見えない身体」

心身二元論を説いたルネ・デカルトは、肉体と精神を分けて考えるべきであ

ると説いている。すなわち、肉体の問題（数値化可能）は科学者が研究する分野のものであり、精神的な問題は科学者ではなく、宗教家や神学家などが関わるべきものであるということだ。しかし、デカルトは、「人の肉体とその内面にはエネルギー体が存在する」ということを認識していたようだ。そうすると、「単純に運動をすればよいわけではない」、「よい食事をすればよいわけではない」、「休養をたっぷりととればよいというわけではない」という当たり前のように繰り返されている健康になるための方法、「運動・栄養・休養のバランス」であるが、どうやらこれにプラスして、肉体とその内面にあるエネルギー体へのアプローチも重要である可能性が高い。国連の機関である WHO が「生命エネルギーにおいても正常であることが、真の健康の定義となる」という見解を持っていることは事実である。これは我々医科学を専門とする科学者にとって非常に興味深いものであるはずだ。

人間が健康に生きるためには、「目に見える身体（肉体）」と、「目に見えない身体（エネルギー体）」の相互作用の理解がカギとなる。これが、今、私が追い求めている研究のテーマである。いわゆる EBM(evidence based medicine) に基づいた医学的、科学的な身体の見方と共に、東洋医学的手法、古神道や密教にある手法によりエネルギー体そのものにアプローチすることで、どうやら人間の肉体は容易にかつダイナミックに変化するものであると考えている。ただし、身体の変化を自覚することはできても、現在のところその現象を明確に数値化することはできない（検出器の精度が飛躍的に向上すれば可能であると考えている）。さて、実際はこんなことを既存の学問領域の中で説いたら大変なことになる。専門領域の学会では大きなバッシングにあい、おそらく淘汰される。だからもちろん私は、現時点において学会発表などではこの辺には微塵も触れない。

4. 文学部の存在意義は「ありえないなんてことはない」を自由に議論できること

最近の大学の学部、特に「学際的分野」とよばれる領域には、人間科学、スポーツ科学、文化構想、文化創造、などいろいろな学部があるが、いずれも中身は、従来「文学部」が求めてきたものであるはずである。英語で表記される場合、文学部は Department of Letters であり、最近では続いて、Arts and Sciences と表記される。Arts とは、「人が造り出す全てのもの」を指す。「Department of Letters, Arts and Sciences」とは抽象的すぎてわかりにくいだが、その由縁を調べると、「学問領域を大胆に乗り越えて新しい「学び」をダイナミックに創造する」とあり、これは人間、社会を深く探り、語学、文学、文化、表現の「本質」を理解していく、人間の本質に共鳴するものを造り上げていく、人間そのものの本質を理解することに繋がると考えられている。すなわち「教養」ということになる。

これは WHO のいう健康の定義の「spirituality」に対応するものであり、古代ギリシアの音楽の体育の位置づけにもあるように、人間の本質、すなわち「霊性」をより高いものに昇華させることで知的活動のレベルがあがり、既存の概念に捉われることなく新しいことを創造し、遂行することができるものということである。そもそもスポーツの語源はラテン語の *deportare* であり、「気晴らしをする、遊ぶ」を意味するものであり、まさにスポーツは「教養」のひとつであったといえる。

さて、既存の概念に捉われているのはどの学問領域も同じであると思われる。しかし、文学部という体育やスポーツの専門に特化した学部ではないからこそ、スポーツを通して人間の身体の本質に迫ることができる可能性がある。文学部というカテゴリーだからこそ、スポーツや身体 of 既存の理解を破壊し、新しいモノを造り出すことができるかもしれない。いや、既存の理解、概念は破壊して良いものなのだ。新しい考えはそこから生まれる。だからこそ「arts and sciences」なのだ。人間が生きるためには「健康」でなければならない。そのための戦略をたてるには、既存の概念だけでは十分ではなく、文学部という教養を主体とする学問大系だからこそ、自由に物事を考え実証していくことができるのだ。そしておそらく、既存の概念を破壊する大胆不敵な動きは、既存の概念をしっかりとおさえた者が何にもとられずに自由に発想するからこそ生まれるものである。本学文学部ではスポーツを専門として理解を深めることは現状難しいが、スポーツや身体運動とその身体に与える影響を教材として様々な事象を観察し、「心身健康である人」がどのような人で、どのように身体と関わることで「健康」を得ることができるのか模索する、すなわちその教養としての役割を理解することが可能である。これは、「ありえないなんてことはない」という学問的に極めて自由な発想が許される、文学部だからこそ自由に議論できるものなのだ。

5. 国士舘大学文学部におけるスポーツの存在意義

さて、国士舘大学の建学の理念にはこうある。

■日々の「実践」のなかから心身の鍛錬と人格の陶冶をはかり、国家社会に貢献する智力と胆力を備えた人材「国士」を養成する

■「国士」養成を理念として、学ぶ者みずからが不断の「読書・体験・反省」の三綱領を実践しつつ、「誠意・勤労・見識・気迫」の四徳目を涵養する

「国士」を養成するためには、心身の鍛錬と人格の陶冶が必要である。これはまさに「本格的教育としての知性的段階に至る以前に、魂が欲望的部分によって

引きずり回されて墮落することのないように、まずは魂の状態を調和のとれたものに調律する。準備教育として音楽と体育をその手段として用いる。」とする古代ギリシアの教育の考え方に共通するものであるとはいえないだろうか。国士館大学文学部でスポーツを学ぶことは、スポーツそのものを学ぶことはもちろんだが、スポーツをすることによって、またスポーツを通して「人間の本質的なもの」を知る目を養い、「国士」として大成することに繋がると考えてよいのではないだろうか。国士館だからこそ、まずは徹底的にスポーツや身体運動を通して人間教育を行い、魂の状態を調和のとれたものに調律、すなわち陶冶するのだ。そして、この準備教育を基礎として様々な学問領域を自らで探求し、智力と胆力を備えていくのだ。「国士」養成を真に考えるからこそ、スポーツや身体活動が人間形成に果たす役割を深く認識し、国士館の教育に導入していく必要があるかもしれない。そのためには既存の考え方を破壊し、「ありえないなんてことはない」という自由な発想もと人間を理解していく覇気が必要である。だからこそその文学部、arts and sciencesなのだ。

まとめ、考察のはてに「文学部でスポーツを学ぶ！スポーツを学ぶ？」

■なぜスポーツを学ぶ必要があるのか

人間が生命体として「健康」であるためにはスポーツ、身体運動が絶対に必要だから。

■なぜ文学部なのか

既存の概念を打ち破ってよい土壌があるから。そして常に進取の精神にて真実を求めていくことこそが、arts and sciencesだから。

■なぜ国士館なのか

「健康」すなわち身体的、精神的、社会的、生命エネルギー的によい状態であることが、国士養成に必要不可欠なものだから。

文学部でスポーツが学べるその真意は、国士養成の基礎となるものであり、体育教員や運動指導者としてのスポーツそのものを知る必要性と、新たな視点から人間の身体を理解するきっかけをつくる可能性の両方の意味があると考えたい。